加藤周一の転向論を考える

倉重　拓

(1) はじめに

日本における知識人の役割と課題、そしてその可能性について、加藤周一ほど広く、深く、また強い使命感を持って考え抜いた知識人を探し出すのは困難である。加藤が知識人として活躍したのは戦後においてだが、青年時代から一貫して国内外の社会問題や多岐にわたる分野への注視を怠らず、膨大な量の著作物と講演記録を後世に残している。よく知られている日本の文化論や文学研究も、その知識人論と密接に関係していることは言うまでもない。加藤はなぜ、そこまで日本の知識人という問題に拘ったのであろうか。

「高みの見物について」(『文学』岩波書店、1954年5月)という文章では、知識人という「責任ある立場」から社会的に発言する人々について興味深い考察が行われている。加藤は学生だった頃の戦争に関する「見透し」が正確であったのは責任がなかったからであり、自分も「彼らと同じ責任ある地位にあったら、やはりまちがっていたかもしれないのだ」と述べている。[(1)] 過去の責任ある知識人の立場に身を置きながら、彼らの「まちがっていた」見透しや行為と真摯に向き合う必要性を肌感覚で捉えていたことに加藤の知識人論の特色があると思われる。

こうした加藤の知識人論の中でも特に重要なのが、知識人と戦争に関するものである。1959年に出版された『近代日本思想史講座　第4巻 知識人の生成と役割』(筑摩書房)に収録されている「戦争と知識人」で

は知識人が大衆一般から区別されており、「国民はだまされていた」という説明は国民の大多数に通用するかもしれないが、知識人には通用しないことが指摘されている。[2] 戦後よくみられた知識人の「戦争責任」論とは異なり、加藤は日本の知識人が「言論の弾圧ということからはなれた内面の問題」として戦争をどう考えたのかが重要なのであり[3]、文学者の仕事とは「その時代の国民ではないにしても、少くとも知識人の精神の内面の問題を語ること」であることを主張している。[4]

このように「戦争と知識人」では日本の知識人の内面の問題を重視する視点から、ファシズムを積極的に支持した日本浪漫派や京都の哲学者、ファシズムを否定した永井荷風、そしてその中間に位置した高見順など多数の知識人に対して分析が加えられていく。また日本浪漫派の一員であった亀井勝一郎が「転向」体験について「本心からの思想などといふものはない」「政治権力に向ったときの本心とは、牢獄は真平だといふ一種の快楽説だけである」[5] と語っていることに注目し、「本心からの」という言葉の意味の解釈によっては転向の問題ではなく、「一般に日本の知識人の多くに共通の、思想と人格、イデオロギーと本心、論理的な思想と感情生活（あるいはむしろ実際の生活）の一定の関係のし方の問題」として理解できることを指摘している。[6]

また「戦争と知識人」では大熊信行による思想と現実の分析、吉本隆明による近代的自我と生活意識の考察などが参照されていることからも、加藤が同時代の関連研究を参照しながら自分なりの転向論を展開しようと試みていたことがわかる。この点に着目した海老坂武は、「戦争と知識人」が加藤の転向論として発想された可能性を指摘した上で[7]、1950 年代半ばに出てきた「一連の転向論（吉本隆明、花田清輝、鶴見俊輔）」に対する応答といった側面があるものの、転向現象そのものではなく転向を生み出した日本的な精神構造の解明に加藤の関心が置かれていたことを主張している。[8] また外来思想を受け入れる側の特定の条件としての日本の

知識人の精神構造における伝統的な型を明らかにするには「『古事記』の昔」まで遡る必要性があると説く[9]加藤の主張を受け、「転向を説明するためには『古事記』までさかのぼらなければいけないのか」と唖然としたという。[10]

日本の転向研究は様々な角度から論じられてきたが、『古事記』にまで遡るものは確かに少ない。加藤はその生涯においてまとまった転向論を完成させることなく他界しているが、加藤はいったいどれだけ日本の転向問題について書き残しているのであろうか。その青年期から晩年までたびたび転向問題を取り上げていることからも、加藤が長期間にわたって知識人と転向の問題について考えてきたことは確かなようである。本稿では、まず戦後の著作物や講演で断片的に触れられてきた転向問題に関する内容を整理した後、河上肇の獄中記を参照しながら加藤の河上肇論について分析を行う。また転向問題について加藤が戦前に書いたノートの内容についても考察を加え、最後に「土着的世界観」という概念を軸に未完に終わった加藤の転向論の意義について論じてみたい。

(2) 断片的な転向に関する記述

加藤の転向論について考察する際、まず加藤がマルクス主義という思想をどのように見てきたのかについて考える必要がある。転向問題を含むマルクス主義に関する議論がイデオロギー的立場によって左右されてきたことを考慮すると、マルクス主義というイデオロギーを日本で論じることの難しさを感じさせるが、加藤はいったいどのようにマルクス主義という外来思想と向きあってきたのであろうか。1959 年 10 月の『群像』に発表された文章では、学生時代にマルクス主義から学んだ事として次のような内容が記されている。

> それでも私が少しばかりよんだマルクス主義の本は、日本の中国侵略戦争が「王道をひろめる」とか何とかいう偉そうなことではなく、要するに植民地獲得のためのいくさであり、「資本主義最後の段階としての帝国主義」のいくさの典型的なものだということを理解するためには、充分に役立つた。[11]

有名なレーニンの帝国主義論が出てくるが、加藤は当時共産党の指導者の名前すら知らなかったという。自国による侵略戦争を批判するため、あらゆる思想から貪欲に学ぼうとしていたことがわかる貴重な証言ともいえる。丸山眞男は加藤が「マルクス主義の方法をくぐった」という表現を使っているが、その理由については次のような説明を加えている。

> というのは、イデオロギー批判に基づく日本思想史にしても日本文化史にしても、戦前のマルクス主義の高潮期に、思想史でいえば唯研の永田広志ら、また文学史でいえば近藤忠義とか岩上順一とかいう人たちによってすでに試みられ、そのプラス面と同時にそのマイナス面や限界も十分明らかになったうえで、それをふまえて加藤君が取り入れているからです。[12]

1919年生まれの加藤は、上の世代とは異なりマルクス主義の洗礼を受けることなく、戦争の世代である所謂「星菫派」の世代の一人として青春時代を過ごしている。1946年7月に発表された「新しき星菫派について」(『世代』目黒書店)には「大正時代の都会文明は既に滅び、社会は秩序と礼節とを失い、藝術のメチエは忘れられ、批判精神はマルキストたちの退陣と共に地を払っていた」という件があるが、批判精神が欠如したある医学生の姿も描かれている。[13] この医学生は戦前に負ければ玉砕、戦後に平和や民主主義を唱えていたという。その思想と信念が「新聞紙

と共に、全く誠実に、何等政策的意味を含まずに、変り得る」ことについて、加藤は次のように語っている。

> 此処に、寸毫の良心の呵責を感じることなしに、最も狂信的な好戦主義から平和主義に変り得る青年、殆ど総てのよき藝術にかなり深い理解を示しながら、その教養が彼の父親の戦時利得を待ってはじめて可能であったと云うことを理解しない青年、かなりの本を読み、相当洗煉された感覚と論理とを持ちながら、凡そ重大な歴史的社会的現象に対し新聞記事を繰り返す以外一片の批判もなし得ない青年、充分に上品であり、誠実であり、私の如き友人に対してさえ遺憾なく親切でありながら（私も又彼との接触には出来るだけの親切を以て答えよう）、例えば彼の父の如き軍国の支配階級の犬共が搾取し、殺戮し、侮辱した罪なき民衆に対しては、全く無感覚な青年がいる。しかもこの青年は決して例外でない。[14]

この医学生に関する記述からは、多くの犠牲を生んだ侵略戦争から何の教訓も引き出そうとしない同世代に対する激しい失望が感じられる。また「知識階級」の一人として、時勢に流されない思想や信念の在り方を自己の問題として考える青年の姿を見出すこともできる。「新しき星菫派について」では、転向の問題が直接論じられているわけではない。しかし花森重行が指摘するように、青年加藤が「無自覚に進展する転向という問題」を射程に捉えていたと解釈し、鶴見俊輔が手掛けたような「技術系テクノクラートの無自覚な転向の問題との共通性」を読み取ることも不可能ではない。[15]

鶴見俊輔といえば「思想の科学研究会」の転向研究会による『共同研究――転向』がよく知られているが、同会主催の共同討議「現代世界と転向」に加藤が参加していることは注目に値する。1959 年 5 月 10 日に

開催されているため「戦争と知識人」の執筆時期と重なっていた可能性も考えられるが、加藤のほかには荒正人、猪木正道、久野収、古在由重、竹内好、本多秋五、丸山眞男、南博など錚々たる顔ぶれが参加し、様々な角度から転向問題とその研究の意義について議論を展開している。加藤はあまり発言していないが、転向の問題についていくつか自分の意見を述べている。

転向とは「被支配層階級の立場の思想から支配階級の立場の思想に変ること」であると定義する古在由重に対し、加藤は次の二点を強調している。加藤によれば、支配階級と被支配階級のイデオロギーがあるため単一の形ではなく現象的には複数となって出てくる可能性があり、転向という言葉の持っている鋭さを失うことなく、またその概念をなるべく広くとる必要性がある。[16] 更に転向の原因が必ずしも「状況の変化」ではないことを指摘し、拷問や個人的経験、そして新たな経験がもたらす個人のイデオロギーの変化についても言及している。[17]

加藤は共同討議でこうした議論を展開しているが、海老坂が「戦争と知識人」について指摘したように、一連の発言からは独創的な考えが伝わってこない[18]。加藤は転向者の個人的経験について言及しているが、「戦争と知識人」で論じた知識人の内面における変化と関連づけられておらず、「個々の転向の場合に入ってみないと、いちがいに言えない」[19] と一般論で片付けられてしまっている。このように 1959 年の転向論は物足りない部分が目立つが、加藤がこうした議論の場で年長の参加者たちから多くのことを吸収したことは想像に難くない。このように加藤が第二の出国の直前に優れた転向研究の成果に触れ、転向研究に関心を示す一流の学者たちと交流があったことは、加藤の転向論とその発展を考える上でも重要である。

「蓄積の時代」と称されたヴァンクーヴァーでの約 10 年間を経た後に執筆された『日本文学史序説』（以下『序説』）においても、第 11 章「工

業化の時代」第５節「マルクス主義と文学」を中心に転向の問題を取り上げているが、転向現象そのものへの踏み込んだ分析は展開されていない。しかし加藤はマルクス主義の日本文学への寄与を論じる際、マルクス主義によって文壇の外へ連れ出されることで日本の文学者たちが社会と歴史に対し責任を取ることを学んだことを指摘し、次のように述べている。

> しかしマルクス主義が一世代の文学者の眼を政治社会現象に向ってひらいたということは、また「転向」後の多くの作家が、戦争と軍国主義の積極的な支持者となり得ることをも意味していた。かつての社会主義の理論家たちは、「大東亜共栄圏」を理論化するためにも働いた。マルクス主義を放棄した文学者は、彼らの社会的関心を放棄したのではなく、彼らのなかには、その関心をまさにマルクス主義とは対極的な「イデオロギー」に集中するものがあらわれた。[20]

こうした人々の典型的な例として、加藤は日本浪漫派を挙げている。加藤によれば、日本の文学者たちがマルクス主義を通して文壇の外の世界、つまり日本の社会と歴史に対して関心を抱くということが、マルクス主義者及びその同調者たちが国家主義へと転向していく前提条件となっていたということになる。この問題は知識人と大衆の関係という視点からも論じることができるが、後述するように『序説』にて展開される外来思想と「土着的世界観」の問題とも関わってくる問題である。

また晩年の講演記録からも、加藤が長期間にわたって日本の転向問題に取り組んできたことがわかる。2001 年 3 月 12 日、加藤は香港中文大学にて「日本の転向文化」（Japanese Conversionary Culture）と題された公開講義を英語で行っている。筆者の知る限り、この講演内容は日本で出版された加藤の講演集に収められていないが、当時の香港中文大学の

ニュースレターを通してその大まかな内容について知ることができる。講演の翌月に発行された『CUHK Newsletter』第 181 号には「日本の文化評論家による転向文化論」と題された英文が掲載され、講演内容について以下のようにまとめている。

> 「日本の転向文化」と題された講演にて、加藤氏は強い政治的及び社会的な圧力によって人々の精神や立場に急激な変化をもたらす「転向」という日本史における現象を紹介し、その個別的事例の一部に分析を加えた。また講演では、こうした現象を精神・感情・知性のレベルにおける個人・大小集団・イデオロギー間の相互作用のシステムとして、伝統的な日本文化という構造上の枠組みの中に位置づける試みがなされた。[21]

このように講演の内容に関する情報は限られているが、加藤が晩年に国外で日本の転向文化に関する英語講演を行っていたことは注目されるべきである。このニュースレターに書かれた「伝統的な日本文化という構造上の枠組み」の中に転向現象を位置づけようとする試みも、加藤周一ならではの仕事といえる。

また加藤はこの講演で日本の転向における個別的事例を取り上げたとされているが、中野重治と河上肇の転向問題を扱った可能性が高いように思われる。1930 年代に現れた様々なタイプの転向者の中でも、加藤が注目したのはマルクス主義から国家主義への転向を比較的順調に成し遂げた人々ではなく、実際の運動から離脱を余儀なくされるも、信念としてのマルクス主義を放棄しようとしなかった人々である。加藤は中野と河上を後者の典型とみなしているが、彼らの「転向」について次のような解釈を加えている。

戦時中のいわゆる「転向」は、――中野の場合をそう称ぶかどうかは「転向」という言葉の定義による――、必ずしも権力との闘いの放棄ではなく、闘い方の状況に応じた変更（ただし強制されたところの）と解することができるかもしれない。[22]

このように、単なる権力との闘いの放棄ではなく、厳しい状況下でも臨機応変に闘いを続けることに重点が置かれている。こうした加藤の転向論の特徴は、その河上肇論にもよく表れている。日本のファシズムと転向の問題について鶴見俊輔と対談した際、加藤は「転向しても向こう側にいかない」型として河上の例を挙げ、「日本の転向には日本の文化と深くからんだ固有の面もある」ことを指摘している。[23]加藤が個別的に論じた転向体験の中でも、河上に関するものは特に重要である。以下、加藤周一の河上肇論について考察してみたい。

(3) 加藤周一の河上肇論

1976年4月16日付の『朝日新聞』のコラム「言葉と人間」には、「転向または『獄中贅語』の事」と題された加藤の文章が掲載されている。京都帝国大学の教授でありながら左翼運動に身を投じた経済学者、河上肇の転向問題について、4年間の刑期を経て出獄する際の河上の心境が綴られた『獄中贅語』の内容を中心に論じたものである。この獄中記の要領として、第一にマルクス主義を真理とする河上の信念に変りがないこと、第二に「科学的真理」としてのマルクス主義と「宗教的真理」としての意識の自己意識が相互矛盾せず、むしろ相補的に統一され得ると河上が認識していること、そして第三に出獄後は共産主義運動に関与しないと河上が主張していることの三点が挙げられている。[24]また第二点については「真理」の定義が明瞭でないために生じた誤りであると退けつつ、

河上が第三点を譲歩することで第一点をまもり通したことに注目し、次のような評価を与えている。

> しかし第一点、マルクス主義者としての非転向の弁に、そのマルクス主義が積年の読書と資料の検討との結論であり、書籍なく資料のない獄中においてその結論を変更すべき理由がない、というところには、感心する。自由な思索の結果としての信念を、自由のない獄中で変えるわけにはゆかぬとは、弾圧のなかで書かれた『獄中贅語』にいっていない。しかし河上がそう考えていたことを確かである。そしておどろくべきことに、彼はマルクス主義を学問的信念として扱った。したがってその正・非、転向・非転向ということには、学問の自由と資料が関係して、日本の国益・家族・一身上の利益・他の党員の行動などのすべてが関係しない、というのである。この点における前後一貫性は、河上の知的誠実にほかならない。[25]

ここでは、マルクス主義を学問的信念として扱い、学問の自由と資料が存在しない獄中では転向が成立しないと考える河上の知的誠実が高く評価されている。一般的には、マルクス主義者は運動からの離脱を表明しただけで「転向者」とみなされることも少なくない。しかし加藤は河上の獄中記を「非転向の弁」とみなしており、またマルクス主義という思想にある内面的信念と外面的運動を区別することで、後者からの離脱は必ずしも前者の放棄を意味しないと考えていることは注目に値する。学問という手段を通さずに学問的な信念を変えることはできないということは当たり前のようにも聞こえるが、日本の近現代史はそれが如何に困難なことであったかを如実に物語っている。

加藤が評価しているのは、河上の『獄中贅語』にある「私の学問上の信念（マルクス主義の真理性に対する確信）は、微動だもしていないのだ」と

いう件であると思われる。河上はその理由について「刑務所といふ所は、大学などと違つて、学問の研究所ではなく、従つて、さういふ場所で、科学上の真理が新たに把握され得る筈はない」と述べているが[26]、本人が運動からの離脱を重く受け止めていたことにも注意が必要である。1933年に逮捕された際、河上は「獄中独語」という文章も執筆しているが、その中でマルクス主義を信奉するだけではマルクス主義者たりえないとし[27]、運動から離れて共産主義者たる資格を自ら放棄することを同志に対し謝罪している。[28]

河上が晩年に自分の生涯を赤裸々に綴った『自叙伝』は桑原武夫など多くの評論家によって評価されているが、河上の転向体験に関する考察は数少ない。「思想の科学研究会」の転向研究会のメンバーとして活躍した政治学者の藤田省三は加藤より早くこの問題に注目し、「あるマルクス主義者――河上肇」と題された論考を『共同研究――転向』第1篇「戦前」第2章「急進主義者」にて発表している。藤田は河上の学問的信念について、学問の生命が認識価値だけからできあがっていると仮定した場合、実践運動を止めたとしても死んでしまうものではないことを指摘し、「罪を罪として受取りながら、転向後の義務と課題を転向前との連絡線上にて立てた態度は、多くの教訓をわれわれに与えている」と論じている。[29]

また藤田は河上と他の転向者たちの違いにも注目している。獄中で罪悪感を抱きながら日々を過ごした河上は、転向した共産党員が保釈後に全力で共産党の陣営を攪乱する様子を見て「私は死んでもさうした連中の真似だけはしたくないと思つた」[30]という。河上の『自叙伝』にて描かれている大量転向のきっかけを作った佐野学との獄中におけるやりとりも興味深いが、河上と佐野の転向の違いについて藤田は次のような分析を行っている。藤田によれば、佐野ら多くの日本共産党幹部がマルクス主義の理論を使って共産主義の放棄を合理化したのに対し、河上はマル

クス主義というイデオロギーに基づき運動からの離脱が後退であることを確認したのである。[31]

このように加藤と藤田は河上の転向問題に対する態度を高く評価している。しかし1930年代の転向において大きな役割を果たした日本のナショナリズム、つまり国体としての天皇制や国家主義の問題について、河上の獄中記と自叙伝が正面から論じていないことについては触れられていない。藤田と加藤は、河上におけるナショナリズムの問題をどのように考えていたのであろうか。河上が多くの転向者たちとは異なり西洋から日本へと回帰しなかったことについて、藤田は次のように論じている。

> 河上肇の転向過程は、日本人が、自分を否定して完全に西欧化する道筋をとらないで、日本人の肉体的思想の中の一つの部面を生かしながら、ある仕方でそれを分離させることによって、科学的思考と信仰的真理とを相互独立的に両立させる二元論に到達できる道筋の一つを示したのである。この意味で河上の思想史を調べれば、前衛党系の知識人のようにその時代時代の「マルクス主義の祖国」をモデルにしてその型に合わせて自分全身を鋳直そうとする態度ともちがうし、また近代主義知識人が純粋認識的にかつ戦略決定的に西欧と日本の類型的差異を確かにするだけに止まっている態度ともちがって、日本人の思想的肉体の中身を生かしながら深いレベルで近代化する態度を学ぶことができる。だからして「マルクス主義の祖国」あるいは「西欧」から「日本」へ返るという形の急旋回型転向の可能性を少なくしていくこともできるようになる、と考えられる。[32]

藤田は河上が西欧から日本へと「急旋回型転向」をしなかった主な原因として、「日本人の肉体的思想の中の一つの部面」または「日本人の思想的肉体の中身」が生かされたことに注目しているが、こうした概念を

詳しく説明していない。この問題は「河上肇生誕120周年記念講演会」で行われた加藤の演説「河上肇、または手作りの思想」でも取り上げられ、国外で完成した既製品としての思想とは対照的に、河上の思想の本質的な部分が「手作り」であることが強調されている。加藤によると、こうした思想は着替えられないが風雪には耐えることができ、その形成過程において「内なる日本」の克服が決定的な役割を演じるとされている。[33]

藤田のいう「日本人の思想的肉体の中身」を彷彿させるが、克服すべき対象としての「内なる日本」は、内在化（内面化）された過去、自分の心のなかに生きている文化的伝統とも表現されている。時間をかけながら自己のなかに浸透している仏教や儒教、またはキリスト教といった伝統を克服しなければ、河上のように手作りの社会主義を作りだすことはできないのである。[34] このように「手作りの思想」というキーワードを通して河上の転向問題を総括的に分析し、河上が日本へ回帰しなかった理由を「内なる日本」の克服に求めることで加藤は藤田より更に一歩進んだ議論を展開している。

河上の世代が「内なる日本」の克服により多くの歳月を費やし、それが日本回帰を妨げる要因となったという加藤の議論は説得力に富む。しかしこの演説では、河上における「内なる日本」、特にそのナショナリズムの問題が検討されていないことに留意する必要がある。加藤は『序説』第10章「第四の転換期（下）」第12節「幸徳秋水と河上肇」にて、幸徳の処刑から3週間後に脱稿したという河上の論文「日本独特の国家主義」に注目し、「最大至高の価値」は国家にあるとする日本の「国家至上主義」の恐ろしさを指摘するとともに、「死せる幸徳は、生ける河上にそこまで書かせたというべきか」と評している。[35]

大逆事件が河上の国家主義への理解に対して与えた影響の大きさを知る上で注目すべき論文といえるが、加藤は河上のナショナリズムを理解する上で重要な著作物について、「河上肇の「志人」の一面は、第一次大

戦中のヨーロッパを語った『祖国を顧みて』（一九一四新聞連載、一九一五刊）の「ナショナリズム」にもはっきりあらわれていた」[36]と述べている。1913年から2年間ほどヨーロッパに留学していた河上の文章が日本の紙面で連載されたが、その内容を中心に出版した著作のことである。

『祖国を顧みて』で注目すべきは、第2編「日本民族の血と手」の第8章「優等人種は如何にして生ずるや」と第9章「尊き日本民族の血」における内容である。河上は英国系ドイツ人の人種理論家チェンバレン（Houston Stewart Chamberlain）の著作『十九世紀の基礎』（*Die Grundlagen des neunzehnten Jahrhunderts,* 1899）に基づき優等人種の理論を紹介するが、「先づ種の善い人種が居て其が他と血を混へ、而して一旦血を混へた後は厳重に他と隔離して其血の純潔を保つ」[37]ことをその成立条件として挙げている。問題となるのは、河上がこうした優等人種の理論をアジアに応用して論じた次の箇所である。

> 吾々が今日、日本人独特の鞏固なる国民性と国家とを有ち得るに至つたのは、全く吾々の祖先が久しく其血液の純潔を維持し来つた為である。要するに吾々は嘗て人種の大混合を行つた。而して一旦其混合を終へた後は、今日に至るまで既に二千余年の久しきに亘つて永く其血液の純潔を維持し来つたのである。されば日本人位優等人種成立の条件を完全に具備した者は、東洋は勿論全世界に於て其例を見ぬのである。髪の色、眼の色、皮膚の色に於ては、吾々は新附の朝鮮人に酷似して居る、又隣国の支那人とも大差は無い、乍併過去二千年の歴史に於て彼我の間には雲泥の差異がある。[38]

幸徳が処刑された際には日本の国家主義に対して強烈な批判を行っていた河上が、数年後にこうした論調を紙面で展開していたことは注目に値する。こうした理論に基づき、東アジア地域における日本人の優位性、

または指導的役割を説明しようとする試みには、大東亜共栄圏の如き危うさを感じざるを得ない。加藤が指摘した河上の「ナショナリズム」とは、こうした内容のことを指していると思われる。また河上を評価する立場から、加藤が敢えて『祖国を顧みて』におけるナショナリズムの問題を避けた可能性も否定できない。

優等人種の理論は国民の純潔な血液の維持、つまり純血主義を前提としているが、そこからは国民及びその文化の純粋性という問題が出てくる。こうした純粋性に対立する概念として雑種性の問題が出てくるわけだが、河上の優等人種論と加藤の雑種文化論を関連づけて論じることはできないであろうか。加藤は雑種文化論の執筆後に河上の『祖国を顧みて』における優等人種論の問題に気が付き、『序説』にて河上におけるナショナリズムの問題として提起した可能性が高いように思われる。また河上の転向問題を考察する過程において、その優等人種論に対する批判として雑種文化論の意義が加藤によって再発見されたとも考えられる。

ここで重要なのは、河上には『祖国を顧みて』で論じられた優等人種論のようなナショナリズムが確かに存在していたが、加藤のいう「内なる日本」を克服していくなど様々な努力をすることによって、日本の国家主義へと転向していった多くの知識人たちと異なる道を歩むことができたことの意義を改めて考えることであろう。加藤周一の転向論を理解するためには、河上肇の転向問題に関する議論を欠かすことはできない。

(4)『青春ノート』における転向問題

ここまで加藤が戦後の転向研究の動向を意識しながら、自分の問題意識に基づき日本の転向問題と長年にわたって向き合う過程をみてきたが、戦前の青年加藤は転向という問題についてどのような考えを持っていたのであろうか。「加藤周一現代思想研究センター」の努力によって加藤が

戦前に書き記した所謂『青春ノート』の内容が公開され、こうした問いにも答えることができるようになったのは大変喜ばしいことである。同センターのウェブサイトでは、『青春ノート』の原文のフォトコピーを見ることができるが、その一部の内容はすでに活字化もされている。青年加藤の考えを知る上で欠かすことのできない『青春ノート』には様々な事柄や問題が記されているが、その中には日本の転向問題も含まれている。

青春ノートの『ノートⅢ』（1938年9月-1939年1月）には、1939年1月6日付の「マルキシズム」と題された文章が収められている。このタイトルの上下には文字が書かれた後に消された跡が残っており、上の文字は識別できないが、下には「戦争、その他」と書かれていたことが確認できる。この文章の全文はすでに活字化されているが[39]、その重要性を考慮し、原文の修正箇所を含め全文を引用したい。以下、括弧の部分は手稿に書き込まれた削除及び挿入、また誤記と思われる部分に関するものである。

（〇〇〇〇〇〇・削除）
マルキシズム
（戦争　その他・削除）

戦争が始まつて（無数の・挿入）マルキストが転向シた。転向シて転向の所以を説く者があり、説かない者がある。説かない者はシばらシ（不要・誤記）くおく。自ら転向の所以を説く者の言葉をきけば、とにかくみつともない光景である。マルキシズムは実に壮麗な論理の殿堂であるが、転向者は彼等が嘗つて（の・削除）奉仕シた（〇〇・削除）この複雑な体系（にお・削除）を（日本・削除）“我々は日本人である”と云ふ甚だ単純な体験（〇・削除）でおき代へてゐる。彼等が

マルキストであつたときにもそれ位の体験でマルキシズムがくつがへるかへ（く・誤記）つがへらぬかを考慮シなかつたはずはない。つまり“我々は日本人である”と云ふことの先にマルキシズム（を・削除）があると信ジてゐたであらう。所が今（は・削除）彼等はマルキシズムの先に“我々は日本人である”と云ふ体験があるのだと信ジてゐる。この矛楯がみつともないのではない。みつともないのは（どちらが・削除）一方が終つた所に一方がはぢま（つてゐる・削除、るのだ・挿入）と信じることそのことである。

マルキシズム（は・削除）が日本のインテリを捉へたのは、（日本・削除、日本・挿入）には哲学（の・削除、的・挿入）傳統がなかつたからである。マルキシズムが日本のインテリから（○○・挿入、○○・削除）離れたのは、日本には論理的傳統がなかつたからである。形而上学なぞはどこを探シても見當らぬのに“あゝ形而上学よ”と云つて見た所で仕方がない。体験のない言葉で論理をくみたてゝ見た所で、腹がへつてくれば馬鹿々々シくなるのが當り前である。14・1・6 [40]

19歳の青年によって書かれたとは思えない内容だが、加藤が当時日本のマルクス主義者及びその転向問題について感じていたことが赤裸々に書かれている。この「マルキシズム」という文章に関する研究はまだ少ないが、五味渕典嗣は青年加藤に対する小林秀雄の影響を指摘している。五味渕によると、この文章の第二段落には小林の『私小説論』などにみられる文学観が反映されているほか、言葉の言い回しにおいても小林の批評とよく似ているところが存在する。[41] 青春ノートでは小林秀雄論を書き、『序説』においても両大戦間の日本の文化的状況に対する小林の深い洞察を評価している [42] ことから、青年加藤が批評家としての小林秀雄に注目していたことは明らかである。

しかし加藤は『序説』において、小林がマルクス主義の客観的歴史主

義に対して主観的で超歴史的な内的経験を対立させることで、「モーツァルトについて、美しく正確に語ることを可能にしたと同時に、日本の中国侵略戦争について、冷静に客観的に語ることを不可能にした」[43]ことも指摘している。戦前に青年加藤が小林のこうした問題を意識していた可能性が高いことを踏まえると、小林とはまた異なる立場からマルクス主義者の転向問題と向き合っていたことを考慮した上で研究を進める必要があるであろう。

「マルキシズム」では転向問題についても興味深い議論が展開されていることから、加藤の転向論を考える上で極めて重要なテキストであることは言うまでもない。この文章は「戦争が始まつて無数のマルキストが転向シた」という言葉ではじまり、日本における論理的伝統の欠如、また体験なき言葉で論理を組み立てることの虚しさなどが指摘されている。第一段落では、転向の理由を「説く者」と「説かない者」に転向者が分類され、前者について議論が展開されていく。

青年加藤は転向理由が語られる様子を「とにかくみつともない光景」とし、マルクス主義という複雑な思想体系が「我々は日本人である」という単純な体験に置き換えられたことを問題視している。加藤は戦後に河上や中野など転向の理由を「説かない者」について論じているが、亀井勝一郎の例などを除き「説く者」については多くを語っていない。加藤の転向論を総括的にとらえるためにも、こうした転向者たちに関する記述は重要であるといえる。

「マルキシズム」では、日本のマルクス主義者たちは日本人であるという実感の先に、更に進んだものとしてのマルクス主義が存在すると信じていたが、1939年の段階において前者と後者の関係が逆転してしまったと書かれている。またこうした変化そのものではなく、国内外を問わず「先」にあるものに固執する日本の知識人の価値観に注目していることも興味深い。マルクス主義という外来思想と日本人という実感の間で揺れ

続ける知識人について考察する際、加藤の雑種文化論と関連づけて論じることもできるからである。

加藤の「日本文化の雑種性」(『思想』岩波書店、1955年6月)はマルクス主義及び転向の問題について触れていないが、日本文化における「純粋化運動」の問題について論じている。加藤はこの運動を、日本種の枝葉をおとして日本を西洋化しようとする純粋西洋化、そして西洋種の枝葉を除いて純粋に日本的なものを残そうとする純粋日本化という二つの型に分け、「いずれも成就するはずのない念願」として退けている。[44]「マルキシズム」に出てくる「一方が終つた所に一方がはぢまるのだと信ジる」人々は、純粋西洋化が終わったところに純粋日本化の始まりを見出し、また後者の終わりに前者の始まりを感じ取ってきたのであろう。こうした悪循環をたち切るために考案された雑種文化論の背景には、転向の理由を説くみっともない人々に対する青年加藤の憤りが存在していたとしてもおかしくない。

加藤の『青春ノート』には、「マルキシズム」以外にも転向問題を論じた文章がもう一つ存在する。『NOTES Ⅷ』(1941年5月–1942年4月)に収められた「「学生と時局」と云ふ目下流行の問題に関聯して」という文章である。『婦人公論』1941年7月号に掲載された「学生と時局」という学生数人による作文を論じたものだが、転向問題についても興味深い議論が展開されている。加藤は思想と政治というカテゴリーを対立させながら、次のような分析を行っている。

> マルキシズムからの「転向」とは一体何への転向であるか? それは政治への転向に他ならない。政治は観念ではない。何々イズムと云つた思想的傾向などではない。政治はひとつの実行の技術であつて、マルキシズムともリベラリズムともカテゴリーを異にする。故にこの場合、「転向」現象のあいまいさは、転向を同じカテゴリーの

中の変化と見ることに由来するのであつて、それをカテゴリーの転換と解することに依て明かとなるはずのものだ。「マルキシズムよりの転向」はより正確に「思想よりの転向」として表象さるべきであり、この現象は本質的に政治の精神への優越の表現に他ならぬ。つまり今日、我々の場合に於ても、互ひが互ひを常に誤解すると云ふ精神上の混乱は、精神の上に支配するものが、もはや観念ではなく、観念とは本来異質なものであると云ふ所に存する。政治的精神は行為の中で、賛成し、共同し、団結し、互ひに利用する。しかし嘗て互ひに理解したことはなかつたし、又理解する必要もない。巧妙に誤解することが、政治の本質である。(45)

ここで加藤はマルクス主義「から」の転向とは政治への転向であることを強調すると同時に、自由主義者がマルクス主義者になるというような思想というカテゴリー内での変化ではなく、様々なイデオロギーを含む「思想」というカテゴリーから「政治」という異なるカテゴリーへの転換として転向問題を考察する必要性を指摘している。またこうした現象について政治が精神に優越する表現に他ならないとも書いているが、そもそも理解が必要とされない「政治」というカテゴリーを「思想」や「精神」から切り離す考え方は興味深い。加藤が後に河上に注目したのも、河上が思想から政治への転換としてではなく、思想というカテゴリー内での問題として自身の転向体験を考えていたことと関係しているのではないであろうか。このように加藤の転向論を考える上で『青春ノート』に記載された内容は極めて重要であり、また戦前と戦後という異なる時代を生きた加藤周一の思想の全体を読み解く際にも不可欠な資料といえる。

(5) 土着的世界観と転向論

加藤が戦後と戦前にどのように転向問題を論じてきたのかをみてきたが、こうした断片的な内容をまとめるだけでは加藤の転向論の全体像、そしてその核心を描き出すことはできない。本人が完成させなかった仕事を他者が引き継ぐのは極めて困難であることを踏まえながら、青年期から晩年まで転向問題について考えてきたにもかかわらず、加藤が転向論を完成させなかった理由について最後に考えてみたい。この問いに答えるには、加藤が『序説』で論じた日本における外来思想と「土着的世界観」の関係に注目する必要がある。

加藤は1973年1月に『朝日ジャーナル』で「日本文学の特徴について」を発表し、日本人の世界観の歴史的な変遷について論じている。日本における代表的な外来思想には仏教、儒学、キリスト教、そしてマルクス主義などがあるが、日本人の世界観は多くの外来思想の浸透によってよりも、土着的世界観の執拗な持続、そしてそのために繰り返された外来の体系の「日本化」によって特徴づけられてきたとされている。[46] 加藤によれば、日本の土着的世界観が外来の超越的世界観と出会った時に発生する現象として、第一に外来の世界観がそのまま受け入れられる場合、第二に土着的世界観を足場として拒絶反応を示す場合、そして第三に外来思想が「日本化」する場合の三つの型が存在する。[47]

それでは、外来思想としてのマルクス主義の転向問題を上記の三つの型に当てはめると、一体どうなるのであろうか。外来の世界観がそのまま受け入れられた場合はマルクス主義への転向、土着的世界観を足場として拒絶反応があった場合はマルクス主義からの転向、そして外来思想が「日本化」した場合は日本の特殊性に応じたマルクス主義の日本型が形成されるというような解釈が成り立つ。第一の受け入れと第二の拒絶が密接な関係にあることは多くの転向者の事例からも理解できるが、第

三における外来思想の「日本化」と日本型マルクス主義の問題は慎重に論じる必要がある。外来思想としてのマルクス主義の「日本化」という問題は、土着的世界観を足場として外来思想であるマルクス主義を単純に拒絶するのとは異なり、天皇制など日本の特殊性に応じたイデオロギーとしてマルクス主義を利用しようとした転向者たちとも関係してくる問題だからである。

加藤が外来思想の「日本化」にわざわざ括弧をつけたのも、こういう問題を懸念してのことかもしれない。しかし外来思想としてのマルクス主義の「日本化」は必ずしも弊害をもたらすわけではない。加藤による河上肇論が、「内なる日本」を克服することで極端な国家主義を媒介しないマルクス主義の「日本化」も可能であることを示している。加藤はまた外来思想の「日本化」の方向にも注目し、外来の世界観の体系が日本の歴史過程のなかで変化する際、変化には必ず一定の方向があることから、土着的世界観によって引き起こされる変化の力はあらゆる時代を一貫していることを主張している。[48]

マルクス主義の「日本化」という問題について、雑種文化論では若干異なる議論が展開されていたことも注目に値する。加藤は「雑種的日本文化の希望」(『中央公論』中央公論社、1955年7月)にて、西洋伝来のイデオロギーの中でもマルクス主義が唯一、ある意味において「日本の土に根をおろした」ことを主張、そのおおまかな説明として、他の輸入イデオロギーと異なりマルクス主義が大衆自身の具体的な問題とふれあったこと、そして外国ですでにできあがった型がそのまま輸入されたため日本の特殊性に応じたイデオロギーの日本型を生むには到っていないことの二点を挙げている。[49]雑種文化論では「日本の特殊性に応じたイデオロギーとしての日本型」が形成されていないという状況に関する説明だったものが、『序説』では外来思想の「日本化」をもたらす土着的世界観の力そのものに焦点が置かれているのである。

それでは一体、加藤はどのように雑種文化論から土着的世界観へと飛躍したのであろうか。加藤が初めて土着的世界観を論じた「日本文学の特徴について」が発表される数カ月前、丸山眞男の「歴史意識の「古層」」が収録された『日本の思想』第6「歴史思想集」（筑摩書房、1972年）が出版されていることに注目したい。丸山はこの論文で、日本の歴史意識の古層をなし、その後の歴史の展開を通じて執拗な持続低音（バッソ・オスティナート）として響き続けてきた思惟様式の中から、「なる」「つぎ」「いきほひ」という三つの原基的な範疇を取り出すことができると論じている。[50]そして日本の歴史意識の複雑多様な歴史的変換をこの単純なフレーズに還元するつもりはないことを断った上で、次のように述べている。

> むしろ支配的な主旋律として前面に出て来たのは――歴史的思考だけでなく、他の世界像一般についてもそうであるが――儒・仏・老荘など大陸渡来の諸観念であり、また維新以降は西欧世界からの輸入思想であった。ただ、右のような基底範疇は、こうして「つぎつぎ」と摂取された諸観念に微妙な修飾をあたえ、ときには、ほとんどわれわれの意識をこえて、旋律全体のひびきを「日本的」に変容させてしまう。そこに執拗低音としての役割があった。[51]

田口富久治が指摘するように、丸山の「古層論」という概念の「カウンターパート」として加藤の「日本の土着的世界観」を認識することも可能である。[52]主旋律であったはずの輸入思想を「日本的」に変容してしまう「執拗低音」に関する件から、外来思想を「日本化」する「土着的世界観」を連想するのは不自然なことではない。加藤本人も『序説』の終章にあたる「戦後の状況」において、「三〇年代に興った超国家主義は日本思想史の例外ではなく、本来そこに内在した問題の極端な誇張にすぎなかった」こと、そしてこのような見方が丸山の仕事の全体を一貫し

ていることを指摘している。そして丸山の「古層論」の内容を踏まえた上で「日本の土着的世界観」について自ら分析を行い、「丸山の指摘したように政治意識や歴史意識にあらわれるばかりでなく、われわれが『日本文学史序説』においてみてきたように、また美学的領域や日常生活における行動様式の全体にもあらわれる」と論述している。[53]

加藤が同時代の知識人の優れた業績を吸収しながら思考するタイプの知識人であったことを考えると、両者がこのような形でつながってくるのも当然のことかもしれない。加藤の転向論を考える際、こうした同時代人の影響を過小評価することはできない。1959年の転向問題に関する共同討論では加藤の前で、魯迅研究者の竹内好が日本でなければできない学問として「転向学」というものを提起し、丸山眞男がこれに応じる[54]というやり取りも展開されている。竹内が「近代とは何か（日本と中国の場合）」（『東洋文化講座』第3巻、白日書院、1948年11月）にて提出した日本の「転向文化」と中国の「回心文化」という仮説と加藤の転向論、特にその「土着的世界観」との関係については、竹内と加藤の極めて興味深い関係を踏まえた上で別の機会に改めて論じてみたい。

加藤は『序説』という大作を、「時代の条件は、――あるいは一世代の現実は、その受容や描写よりも、それを批判し、拒否し、乗り超えようとする表現の裡に、またその表現の裡にのみ、抜きさしならぬ究極の性質を、あらわすのである」[55]という言葉で締めくくっている。日本の知の営みにおいて外来思想を「日本化」する力も、外来思想の批判、拒否そして克服とかかわってきたことは言うまでもない。日本で長年にわたって形成されてきたまさに文化的伝統でありながら、日本の転向問題でみられたように巨大なナショナリズムへの浪へと発展するリスクを抱えていることもまた否定できない事実である。

加藤が転向論を完成できなかった最大の理由も、マルクス主義という外来思想の主旋律を「日本的」に変容した「執拗な持続低音（バッソ・オ

スティナート)」、またこうした現象をもたらす「土着的世界観」の力を見出すことで、1930年代の日本で起きたマルクス主義から国家主義への転向という現象を解明する有効な手段を手に入れつつも、責任ある立場の知識人としてこの二つをつなぎ合わせて研究することに慎重とならざるを得なかったからではないであろうか。加藤周一の仕事から学ぶ際、非常に多くのことが書かれると同時に、非常に多くのことが書かれなかったという事実と向き合わざるを得ない。青年期から晩年にわたって取り組んできた問題であろうと、最後まで慎重に対応しようとした加藤周一の振る舞いにこそ、人々の社会と歴史に対して責任を負おうとする知識人のあるべき姿を見出すことができるのかもしれない。

註

(1) 加藤周一「高みの見物」,『雑種文化――日本の小さな希望』, 東京：講談社, 1974年, 21頁。

(2) 加藤周一「戦争と知識人」,『加藤周一著作集』第7巻, 東京：平凡社, 1979年, 290頁。

(3) 加藤周一「戦争と知識人」,『加藤周一著作集』第7巻, 東京：平凡社, 1979年, 291頁。

(4) 加藤周一「戦争と知識人」,『加藤周一著作集』第7巻, 東京：平凡社, 1979年, 293頁。

(5) 亀井勝一郎『我が精神の遍歴・私の文学経歴』, 東京：日本ソノサービスセンター, 1969年, 121頁。

(6) 加藤周一「戦争と知識人」,『加藤周一著作集』第7巻, 東京：平凡社, 1979年, 312頁。

(7) 海老坂武『加藤周一――20世紀を問う』, 東京：岩波書店, 2013年, 128頁。

(8) 海老坂武『加藤周一――20世紀を問う』, 東京：岩波書店, 2013年, 125頁。

(9)　加藤周一「戦争と知識人」,『加藤周一著作集』第 7 巻，東京：平凡社，1979 年，330 頁。

(10)　海老坂武『加藤周一――20 世紀を問う』，東京：岩波書店，2013 年，127 頁。

(11)　加藤周一「文学的自伝のための断片――Arma virumque cano」，臼井吉見監修『戦後文学論争』上巻，東京：番町書房，1972 年，325 頁。

(12)　丸山真男「文学史と思想史について」,『加藤周一著作集』第 5 巻附録「月報 15」，東京：平凡社，1980 年。

(13)　加藤周一「新しき星菫派について」,『加藤周一著作集』第 8 巻，東京：平凡社，1979 年，19 頁。

(14)　加藤周一「新しき星菫派について」,『加藤周一著作集』第 8 巻，東京：平凡社，1979 年，19 頁。

(15)　花森重行「孤独の精神　開かれた言葉――加藤周一の日本文化論における歴史の導入をめぐって」,『現代思想』7 月臨時増刊号，2009 年 7 月。

(16)　思想の科学研究会編『共同研究――転向』（下巻），東京：平凡社，1962 年，400 頁。

(17)　思想の科学研究会編『共同研究――転向』（下巻），東京：平凡社，1962 年，401 頁。

(18)　海老坂武『加藤周一――20 世紀を問う』，東京：岩波書店，2013 年，128 頁。

(19)　思想の科学研究会編『共同研究――転向』（下巻），東京：平凡社，1962 年，401 頁。

(20)　加藤周一『日本文学史序説』（下），『加藤周一著作集』第 5 巻，東京：平凡社，1980 年，511 頁。

(21)　"Japanese Cultural Critic on Conversionary Culture", *CUHK Newsletter* No.181（Vol.12.6），April 4th, 2001. *Entitled 'Japanese Conversionary Culture',the lecture presented and analysed some individual cases of 'conversion', i.e. radical change in people's mind and stance resulting from strong political or social pressure, in Japanese history. Attempts were made to place the phenomenon in a structural framework of*

traditional Japanese culture, as a system of interactions between the individual, small and large groups, and ideologies, at the levels of the mind, the emotional, and the intellectual.

(22) 加藤周一「中野重治文再説」,『中野重治全集』第 28 巻「月報 28」, 東京：筑摩書房, 1980 年。

(23) 加藤周一, 鶴見俊輔, 連続対談「二十世紀をどう見るか」⑤「ファシズムと日本の「転向」」,『潮』483 号, 1999 年 5 月。

(24) 加藤周一「転向または『獄中贅語』の事」,『加藤周一著作集』第 15 巻, 東京：平凡社, 1979 年, 192–93 頁。

(25) 加藤周一「転向または『獄中贅語』の事」,『加藤周一著作集』第 15 巻, 東京：平凡社, 1979 年, 193 頁。

(26) 河上肇「獄中贅語」,『河上肇著作集』第 8 巻, 東京：筑摩書房, 1964 年, 355 頁。

(27) 河上肇『自叙伝』(下),『河上肇著作集』第 7 巻, 東京：筑摩書房, 1964 年, 68 頁。

(28) 河上肇『自叙伝』(下),『河上肇著作集』第 7 巻, 東京：筑摩書房, 1964 年, 66–67 頁。

(29) 藤田省三「あるマルクス主義者――河上肇」, 思想の科学研究会編『共同研究――転向』(上巻), 東京：平凡社, 1959 年, 249 頁。

(30) 河上肇「獄中贅語」,『河上肇著作集』第 8 巻, 東京：筑摩書房, 1964 年, 365 頁。

(31) 藤田省三「あるマルクス主義者――河上肇」, 思想の科学研究会編『共同研究――転向』(上巻), 東京：平凡社, 1959 年, 249 頁。

(32) 藤田省三「あるマルクス主義者――河上肇」, 思想の科学研究会編『共同研究――転向』(上巻), 東京：平凡社, 1959 年, 238 頁。

(33) 加藤周一「河上肇、または手作りの思想」,『河上肇――21 世紀に生きる思想』, 京都：かもがわ出版, 2000 年, 39 頁。

(34) 加藤周一「河上肇、または手作りの思想」,『河上肇――21 世紀に生きる思想』, 京都：かもがわ出版, 2000 年, 39–40 頁。

(35) 加藤周一『日本文学史序説』(下),『加藤周一著作集』第 5 巻, 東京：平

凡社，1980 年，431 頁。

(36) 加藤周一『日本文学史序説』(下)，『加藤周一著作集』第 5 巻，東京：平凡社，1980 年，437 頁。

(37) 河上肇『祖国を顧みて』，『河上肇全集』第 8 巻，東京：岩波書店，1982 年，50 頁。

(38) 河上肇『祖国を顧みて』，『河上肇全集』第 8 巻，東京：岩波書店，1982 年，51 頁。

(39) 加藤周一著，鷲巣力，半田侑子編『加藤周一青春ノート――1937–1942』，京都：人文書院，2019 年，57 頁。

(40) 加藤周一「青春ノート　ノート III 1938 年 9 月–1939 年 1 月」，立命館大学図書館「加藤周一文庫デジタルアーカイブ」，https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/viewer/mp000072/seishun_note3/。

(41) 渡辺考，鷲巣力編『加藤周一　青春と戦争――『青春ノート』を読む』，東京：論創社，2018 年，91 頁。

(42) 加藤周一『日本文学史序説』(下)，『加藤周一著作集』第 5 巻，東京：平凡社，1980 年，542–43 頁。

(43) 加藤周一『日本文学史序説』(下)，『加藤周一著作集』第 5 巻，東京：平凡社，1980 年，544 頁。

(44) 加藤周一「日本文化の雑種性」，『加藤周一著作集』第 7 巻，東京：平凡社，1979 年，11–12 頁。

(45) 加藤周一「青春ノート　NOTES Ⅷ 1941 年 5 月–1942 年 4 月」，立命館大学図書館「加藤周一文庫デジタルアーカイブ」，https://adeac.jp/ritsumeikan-univ-lib-KatoShuichi/viewer/mp000345/seishun_note8v2/。

(46) 加藤周一『日本文学史序説』(上)，『加藤周一著作集』第 4 巻，東京：平凡社，1979 年，28 頁。

(47) 加藤周一『日本文学史序説』(上)，『加藤周一著作集』第 4 巻，東京：平凡社，1979 年，31 頁。

(48) 加藤周一『日本文学史序説』(上)，『加藤周一著作集』第 4 巻，東京：平凡社，1979 年，32 頁。

(49) 加藤周一「雑種的日本文化の希望」，『加藤周一著作集』第 7 巻，東京：

平凡社，1979 年，40 頁。

(50) 丸山眞男「歴史意識の「古層」」，『丸山眞男集』第 10 巻，東京：岩波書店，1996 年，45 頁。

(51) 丸山眞男「歴史意識の「古層」」，『丸山眞男集』第 10 巻，東京：岩波書店，1996 年，45 頁。

(52) 田口富久治「丸山眞男の「古層論」と加藤周一の「土着世界観」」，『葦牙』第 28 号，2002 年 8 月。

(53) 加藤周一『日本文学史序説』（下），『加藤周一著作集』第 5 巻，東京：平凡社，1980 年，559 頁。

(54) 思想の科学研究会編『共同研究――転向』（下巻），東京：平凡社，1962 年，423–24 頁。

(55) 加藤周一『日本文学史序説』（下），『加藤周一著作集』第 5 巻，東京：平凡社，1980 年，577 頁。

（くらしげ たく　清華大学外国言語文学部副教授）